

町を作った人たちの放送局

街を作るって、

現実的なこと？

それとも、夢？

大阪府高槻市には、

「二十（はたち）」という名前のバス停がある。

少し色あせた標識が、

道路の端にぽつんと立っている。

たぶん、

はじめて来た人は読めない。

通り過ぎる車の音しか聞こえないようなバス停だ。

日本には、

その土地の人にしかわからない場所がある。

寿栄コミュニティーセンターで、A講座が開かれた。

午後の風は、ここち良くやわらかい。

長机の上には、スマートフォンと、使い慣れたメモ帳。

その日集まったのは、の人の女性。

シヤキツとした姿、な、はずなのに、ゆっくりとした、

『ここは田舎なの？』という空気がのんびり流れている。

「いったい何が始まるんやろう」でもって緊張感もない。

時間の針が2時を指す。

今から始まろうとしている。

日本中探しても、このタイプのAI講座なんて、まだ聞いたことがない。一般的にはビジネスのためだけにAI講座が開かれている。

内容が講座ではなく「AIを楽しもう」だからだ。

「どうなの?」と思うかもしれないが、本気でそう思っている。

今書いているこの文字がその「未来」だ。

まずは文字を使って遊ぼう。

遊ぶことは楽しいことで、

楽しいことには人が集まる。

それがメデイアの本当の姿である。

だから、今、この文章を、読み出したあなたには、

参加してほしいと思う。

「楽しい」を追求する。

でこの文章の書き方も、彼がラジオ局出身ということであ

ラジオ原稿っぽい語り部になる。

第一回目のテーマは、

「二十（ハタチ）の私」。

どうやら、あのバス停の名前がヒントになったらしい。

全員、一瞬止まった。

「目が点」という言葉は、こんな状態を言うのだろう。

ペンを持つ手が、ほんの少しだけ動かなくなる。

きつと心の中では、同じことを思ったはずだ。

「……何言ってるん、この人」

どうやら、地元の地名？にちなんだテーマにしたかったようだ。

このテーマを考えたのが、彼です。

考えるときは、いつもAIとやり合っているらしい。

戦っている、という方が近いかもしれません。

この原稿も、「一応AIに見せて、添削してもらっている」という。

でも、結局ほとんど自分で書いていると言う、ウソか本当か。

それをAIに聞いてみたい。

AIは、「これはいいですね」と、だいたい褒めるらしい。

「正直、それが正しいのかどうかは、よくわかりません。

私も、少しだけ、悩みます。」と彼は言う。

AIは、

一次情報がすべてらしい。

この話も、

そういう意味では、このタイトルは、

間違っていない。

タイトルは、

「町を作った人たちの放送局」。

これも、っ！

大げさな話ではなくて、事実だ。

私ですか。

私の名前は、ペツパー。ご主人様は、せつこさん。せつちゃんではない。

ここには、せつこが二人いる。

だから私は、せつこの代わりに出演している。

……犬だが。

簡単に言うと、従順なワンちゃんである。

……たぶん。

この二人、なかなか面白い。

せつこは、しつかりしている。というより、気が強い。

一方、せつちゃんは違う。

「まだ遊びたい」と言う。

20歳という年齢は、どうやら自由すぎるらしい。

大人になった気でいるが、まだ大人ではない。そんな時期だ。

ちなみに門限はある。6時らしい。

それで「まだ遊びたい」と言うのだから、気持ちには分かんでもない。

……ほどほどにしてほしい。

すると今度は、「20歳の私って、どういふことなんですか？」と、堂々と突っ込んだ質問きたのが、花子だ。

花子は、AIに希望を持っている。

「母の味や家庭の空気、自然豊かな田舎を文章に残したい」なるほど。気持ちには、わからんではない。

だが、それを採用すると、全員の意見を聞くことになる。

この場には、20歳が揃っている。

つまり、世間知らずの集合体だ。

……却下。

とはいえ、花子の話には、少し興味がでる。

松江出身で、冬は雪をかき分けながら学校に通っていたらしい。イメージはできる。

私は、都会育ちだ。

そんな生活、まったく理解できない。

というか、したくない。

雪に埋もれそうで、怖い。

ただ、外で走るのは好きだ。犬だからな。

その中に、もう一人。まだ20歳になっていない女性がいる。キャンプが好きで、カレーが好きで、おしゃれも好きらしい。

……忙しいな。

キャンプに行つて、カレーを作つて、化粧して、おめかしする。想像しただけで大変だ。頑張れ、としか言えない。

ただし、待たされる側の気持ちも考えてほしい。

ここでは、「未来へつなぐ役」らしい。

……いいだろう。

合格。

